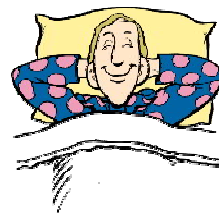


相談室だより (みさき・くろさき 2009年11月)

担当：みさき病院 MSW 三宅

日に日に寒くなり、なかなか布団から抜け出さない季節になってきましたね。
今回は、先日開催された、神経リ八研で私が発表した内容のご報告です。



回復期リ八病棟での認知症・高次脳機能障害のある患者様の退院支援について

大牟田市には、回復期リ八病棟を有している病院が3箇所あります。(米の山病院・天領病院・みさき病院) みさき病院の特徴は、物忘れ外来もあることから、**高齢・認知症・高次脳機能障害**の患者様の紹介が多く、他の回復期リ八病棟からの回復期から回復期の紹介もあります。

そこで、直近6ヶ月のデータを分析し、認知症高齢者の日常生活自立度(以下認知症自立度と記載)からみた、退院支援の結果を調査しました。

09年4月～9月の退院患者年齢構成比は、

～64歳	65～74歳	75～84歳	85歳～
9%	18%	31%	42%

75歳以上で73%を占めていました。

次に、同期間中の認知症高齢者の日常生活自立度の構成比は、

なし	a	b	a	b	M
13%	17%	12%	26%	7%	7%

a以上で70%を占めていました。

この期間の在宅復帰率は平均84%であり、内訳は自宅80%で在宅扱いの施設が20%でした。では、自宅退院患者の入院時の家族の希望を見てみると、施設入所を考えていた家族は30%いました。続いて、自宅退院患者の入院時の家族の希望で認知症自立度構成比を分けてみたら、

自宅希望							
なし	a	b	a	b	M		
30	23	19	4	12	12	0	0
施設希望							
なし	a	b	a	b	M		
9	9	46	9	18	0	9	0

入院時、家族が施設希望していたケースのほうが、

認知症自立度が重度であることがわかりました。ちなみに、平均年齢も比較してみたら、入院時家族が施設希望したケースが81.4歳で、入院時家族が自宅希望したケースが76.7歳と、施設希望したケースのほうが高齢であることが判明。

以上の状況から、入院時家族が施設希望するケースは、認知症自立度が以上で高齢の患者である場合が多いのではないかと考えられます。

そのため、今回は、退院支援を行ったケースで施設希望から、自宅退院に結びつけることができたケースに焦点をあて、何か共通点はないか調べることにしました。(自宅退院された患者様37名中、施設を入院時希望された方は11名) その結果、以下の共通点がわかりました。

- キーパーソンが同居または近所に在住
- 患者様自身が自宅退院を強く希望
- 介護保険サービス再検討の内容
 - 11名中5名は小規模多機能または、ショートステイの導入
 - 新規申請・区分変更申請は11名中8名実施
 - 長期的なことも考え、入院中に施設を申し込んでいただく
 - 施設の申し込みをされたのは、11名中6名
- チームアプローチの重要性
- MSWより、入院前に大変だったことを家族より収集し問題点の抽出
- 病棟、リハでのケアプラン立案
- Dr、病棟、リハでの身体・認知機能の評価
- MSW、リハ、病棟で自宅訪問(必要時複数回実施)
- 病棟、リハでの家族への介護指導および指導計画作成
- 管理栄養士から家族へ栄養指導
- リハ、MSW、病棟、事務での学習会の開催

考察

認知症患者への退院支援は、家族へのアプローチも重要で、不安要因を抽出し、一つ一つ不安要因を解消していくことが自宅退院に繋がる可能性が高いと思われます。

多くの家族は、介護を行うにあたり、長生きはしてもらいたいが、いつまで介護を続けなくてはいけないのかという思いがあるのではないのでしょうか。

そのため、長期的な部分へもアプローチすると、一定の目途が立つため、再度介護への意欲を持っていただくことが出来たのではないかと思います。

～「貧困」について考える～ MSW 緒方

10月24日、県連主催で行われた「生存権を考える講演・シンポジウム」に参加してきました。私は、コーディネーターという立場でした。シンポジストは、大学教授、弁護士、医師、障害施設職員、保母、老齢加算を廃止された当事者の高齢者の方で、それぞれの立場から「生存権」とは何かを、ストレートに話し合いました。その様子の一部と私が考えさせられたことを報告します。

子どもの貧困～「高校の学費が支払えない」～

これは、花園大学の吉永先生の講義のひとつコマで、NHKの特集をVTRで見ました。映像では、「高校生が、親のリストラ・失業等で学費が支払えない実態」が映し出されていました。

教師がアルバイトを推奨、そして、バイト代の取立て

4割の生徒が授業料を滞納しているある公立高校で、先生たちは、なんとか生徒の退学を避けるために、生徒と面談します。

教師；「君、今の状態が分かるよね。」

生徒；「はい、学費が払えていないです。」

教師；「卒業したいよね」

生徒；「はい」

教師；「家の事情（親が失業）も分かっている。バイトをしないか」

生徒；「はい」

そして、生徒のバイト先の給料日に「授業料」を“取り立て”に行くことを決断した。生徒としての辛さ、教師としての辛さ、これを見た会場はなんともいえない感情に包まれました。

この背景には…

子育て世代に当たる20代～40代の、4割近くが低所得の非正規労働者であるにもかかわらず、子どもの医療費、教育費、住宅費、食費等の負担は、正社員家庭と同じく一律に求められ、貧困に拍車をかけています。

高校を卒業しても…

厚生労働省は11月4日、2009年度高校・中学新卒者の9月末現在の就職内定状況を発表しました。それによると、高校生の就職内定者数は6万6,000人（前年同期比32.7%減）、就職内定率は37.6%で前年同期を13.4ポイント下回り、過去最大の下落率となったとしています。

「高校を卒業してもなんとかなる」という、常識めいた考えは通用しないのです。

就職できても…

20代～40代の、4割近くが低所得の非正規労働者。繰り返される貧困の連鎖。

弁護士、医師の一言

このシンポジウムでは、生存権裁判（生活保護の老齢加算廃止の違法性を訴える裁判。全国で裁判が行なわれているが、現段階では、「違法性はない」との判決となっている）に関わっている弁護士、健和会の長崎先生が、『この裁判の不当判決の背景には、私たち「市民」の「貧困観」があるのかもしれない』と述べられました。

「貧困観」を考えることは、「人間らしい生活と何か？」を考えることです。それは、非正規職員と正規職員との比較、お金持ちとそうでない人とに比較、そうでない人と貧乏な人との比較などの「比較」ではありません。このシンポジウムは、こういった「貧困について考える大きなきっかけ」となるとともに、「貧困を他人事として考えれば、大変なことになるといふこと」を教えてくださいました。